



報告

「移動とことば」をめぐる冒険

ある合評会の議論

川上 郁雄* 三宅 和子† 岩崎 典子‡

パネリスト：タスタンベコア・クアニシ、下地ローレンス吉孝、デビッド・チャップマン

© 2019. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

本報告は、2018年12月1日に早稲田大学で行われた『移動とことば』（川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編、2018、くろしお出版）の公開合評会の議論を記録するものです。

今、世界中で「移動する人々」が増加しています。移民、難民の他にもビジネスや留学、結婚など、多様な目的で人々は国境を越えて移動をしています。その結果、複数言語環境で生活する人々や家族は増加する一方です。そのような複数言語環境で成長する子どもたちは初等・中等教育を経て、大学や専門学校へ進学し、複数言語と向き合いながら社会へ出ていくことになります。つまり、大人も子どもも、人生のさまざまな段階で複数言語社会に生きることを実感し、どのように生きるかを考え、日々実践しているのです。したがって、そのような「移動する人々」の生活を理解し、社会や教育のあり方を考えるために、それらの人々の家族や友人、学校教員、さらには国境を越え、時代を超えて遭遇するさまざまな人々も含めた生活世界を、そして人生そのものをまるごと考察することが必要となります。これは新しい研究領域であり、そのため「移動する人々」の生活世界をどのように捉え、どのように理解するか、その研究方法を研究することも必要です。

以上のような問題意識から、「移動する人々」に関わる11本の論考と、編者による「展望討

* 早稲田大学 (E メール : kawakami@waseda.jp)

† 東洋大学 (E メール : miyake@toyo.jp)

‡ 南山大学 (E メール : niwasaki@nanzan-u.ac.jp)

論」をまとめたのが、『移動とことば』です。本書の論考は、日本だけではなく、オーストラリア、パキスタン、シンガポール、タイ、ドイツ、中国、フランス、イギリス、トリニダード・トバコなど多様な国々での実践や調査に基づく論考で、調査協力者も子どもから青年、成人、高齢者、ろう者など、年齢も国籍も背景も多様な人たちについて考察しています。特定の国や集団の研究ではありません。どの論考も、「移動とことば」に留意しつつ、新たな研究領域を切り開こうとしています。

この書に収められた、そのような多様な教育実践や調査研究を、日本語教育以外の専門性を持つ方々に読んでいただき、議論を重ねる合評会を実施しました。比較教育学を専門とするクアニシ・タスタンベコアさん、社会学者の下地ローレンス吉孝さん、日本研究者のデビッド・チャップマンさんに、それぞれ本書の提起した内容についてコメントをいただきました。どのコメントも、「移動とことば」という研究課題を発展させるために必要な、そして重要なコメントでしたので、ここに報告するものです。当日は、フロアの多数の参加者を含め、活発な議論がありました。紙面の都合ですべての議論を記録することはできませんが、コメントに対して本書の編者3人がコメントを付し、本報告としてまとめました。以下、各パネリストの発言、それに対する編者のコメントの順で、掲載します。

1. 「移動する」研究者のポジショナリティ

タスタンベコワ・クアニシ¹

1. 1. はじめに

私はカザフスタン出身ですが、今世界を騒がせているような地域はよく「～スタン」がついている国なので、カザフスタンも危ないんじゃないとか、テロが起きそうなところなんじゃないかという感想を持たれるかもしれません、そのような印象を持たれるのは私としてはとても嫌なんですね。カザフスタンは、とても平和な国です。

カザフスタンは1917年から1991年まではソビエト社会主义連邦共和国（ソ連）という大きな国の一員でした。1991年にソ連が解体してからは独立国家になりました。私はその国の出身

¹ Tastanbekova Kuanysh (筑波大学・比較教育学)。主な論文は「カザフスタンの少数民族教育に関する一考察——教育スタンダードにおける言語教育比重の分析を通して」『筑波教育研究』第13号, pp.39-57. 2015.

で、これから話にも繋がっていく重要なポイントです。

国のマジョリティは、エスニック的にはカザフ民族ですが、私自身はマイノリティ的な意識を持っています。そのことは後でも触れますが、これから『移動とことば』について、私自身の「移動する者」の立場から得た感想についてお話ししていきたいと思います。

1. 2. 3つの「移動」から見た私のバックグランド

私は以前、川上さんが編集された『「移動する子ども」という記憶と力』²という本に出てくる、いろんな移動を経験している子どもたちや大人の話を読んで、本当に涙を流してしまうところもあるぐらい、非常に共感を覚えました。なぜかというと私自身もそういうたくさんの「移動の経験」があるからです。

私が生まれ育った空間はカザフスタンなんですが、時間の中での「移動」もあります。私はソ連時代の最後の10年間を生きた者ですが、ソ連が解体したときに、私は10歳で、歴史的な「移動」を経験しました。

その10年間は私の記憶の中では、とても鮮明で、どうしてもやっぱり今のこととソ連時代のことは当事者として見てしまうところがあります。その後、カザフスタンで大学まで行って、そこから日本に留学しました。最初は「日本語・日本文化研修生」³として一年間来たことがあります。それは1年だけで、筑波大学の日本語・日本文化学類というところにいましたが、そこでの出会いが今の私を決めたと言っていいです。その時、私は、嶺井明子先生という、比較教育学のご専門で、しかもソ連の教育制度・政策を長年に渡り研究されている先生との出会いがあり、私のその後の進路に非常に影響を与えたしました。

その時は、一旦カザフスタンに戻って大学を卒業してから、今度は国費留学生⁴の「研究生」として、また筑波大学に来て、その後は大学院修士課程に入学して修士号を取りました。その後、博士後期課程に入ったんですけれども、家庭の事情で休学して、休学している間に結婚して、夫とドイツに半年くらい行き、さらに、カザフスタンに戻ってきてから、筑波大学へ復学するかどうか迷ったんですけど、復学して大学院で今度は博士号を取り、一度、カザフスタンに戻りました。その後、自分が卒業した筑波大学に6年前に教員として採用されて、再び日本

2 川上郁雄編 (2013) 『「移動する子ども」という記憶と力——ことばとアイデンティティ』 くろしお出版。

3 日本政府の国費留学生制度の一つ。

4 日本政府の国費留学生制度の一つ。

に戻ってきたというのが私の「空間的な移動」です。

「言語間の移動」なんですけれども、私は先ほど申し上げたようにカザフ人なので、いわゆる民族語あるいは母語というのはカザフ語なんですが、カザフスタンは、ソ連時代からロシア語が公用語で、民族間の共通語でしたので、私の場合、いつからロシア語が話せるようになったかという記憶がないくらい、いつもロシア語とカザフ語の両方を話していて、どちらもバイリンガルと思うくらいの感覚で話しているんです。ロシア語で教育を受けたということもあるんですけど、後でお話ししますが、ロシア語は一番優位な思考言語になっていると思います。

カザフスタンの大学では日本語は主専攻でした。英語は中学校から高校まで第一外国語として勉強しました。そして、中国語とフランス語も勉強して読める程度という状態です。ロシア語、カザフ語、英語と日本語の4つの言語に関してはどちらかというと、読めるし、書けるし、(研究)発表できるしという、専門的なレベルでも十分に使えるという自信と言いますか、認識を持っています。

次に「言語教育カテゴリー間の移動」ですが、私は幼稚園と小、中、高はロシア語で教育を受けて、大学ではカザフ語で教育を受けました。なぜかと言うと、ソ連が解体してからも、かつての各共和国においてはそこのマジョリティ民族の言語が国家語になっていて、高等教育もカザフ語で、つまりカザフ語を教授言語とするクラスの方が多く設置されていて、ロシア語のクラスがどんどん縮小して行ったんですね。それで、言語学部の中に、日本語のクラスができたんですね。大学ではロシア語のクラスは有償でした。つまり授業料がかかって、カザフ語で教えるクラスは授業料が免除されていたので、私はその時は家庭内言語だったカザフ語で勉強するという経験を大学ですることになりました。だから、日本語の授業もカザフ人の先生は、カザフ語を使って文法を説明していました。ただ、カザフ語と日本語が非常に似ていて、特に文法的にも近い言語であって、私が日本語の学習に特に苦労したのは漢字くらいですね。文法とか語彙について学べば、すぐに日本語が話せるようになったくらいです。

日本の大学院に行ってからは、日本語でずっと授業を受けています。英語は中高では外国語として週2時間しか勉強していないんですけど、大学院で学んだことが一番大きかったと思います。大学院では日本語で授業があっても、いろんな論文とか文献は英語で読むし、学会発表も英語でしたりすることがあったので、そこからずっと自力で英語を勉強しました。

私はこのような移動を経験しているのですが、自分だけではなく、私の子どもにも移動を経験させているという立場から、この本を読ませていただきました。そして今、いろんな感情的

で情緒的な側面を抑えられないような状態にいます。

1. 3. 私が注目した章

最初の序章から最後の展望討論まで、とにかく非常に情報が豊富で、その意味では非常に刺激を受ける内容だったんですけど、私が特に自分のバックグラウンドとも関係していると思うんですけど、6つの章に注目しました。

まず第1章の岩崎典子さんの章です。ハーフの学生の日本語教育、日本語学、ポートレートが示すアイデンティティ変容とライフストーリーなんんですけど、言語ポートレートという方法が私にとって非常に新鮮でした。私自身も言語ポートレートを描いてみようと思うぐらいの感動で、それはもしかしたら自分自身の言語に関する感覚とそれを理論的に理解するための一つの有効な方法になるのではないかと思いました。そして、その中で私はアイデンティティの変化ということにとにかく注目しました。この章の調査対象となった学生さんも、自分が空間と言語間の移動を経験して変わっていく、そして、今まで自分の中で気づかなかつたことに気づいていくということがあったと思いますが、もしかしたら私自身もそういうことがあるんではないかと思いました。例えば私とカザフ語との関係もそうなんですが、私がカザフスタンの大学で、授業料が払えないのではなくて、カザフ語のクラスを選んだ理由は、やはり私にとってカザフ語が必要という思いがあったんじゃないかなと今になって考えさせられるような章でした。というのは、カザフ語は家庭内言語ではあるんですけど、やはり家庭内言語以上のことには話せないし、話そうともしなかった自分に対する反省もあったし、「あなたはカザフ人じゃない半熟カザフ人だ」とか、「半分しか熟していないカザフ人だから、カザフ語では限られたレベルの会話しか喋れないんじゃないの」と言われたことがあったからではないか。でも、私の中でカザフ語は心、さっきの言語ポートレートで言えば心臓なんではないかということを今になって、振り返るような、考えるような章でした。この章は、最初の章で、この本を読むための基盤を作ってくれました。アイデンティティも、私はカザフ人なのか、カザフ人でないのかということも言語だけに結びつけることは難しいということを読み進めながら、考えさせてくれるような章でした。

その次は、本間祥子さんの第4章、「子どもたちが移動しながら生きる自分と向き合う授業実践—シンガポールの日本人学校の事例から」ですね。ここで一番印象に残ったとことは、子どもたちに自分のことを語らせるということがとても新鮮でした。私も自分の過去のことを人前

で話したことがないんですね。自分がどういう教育を受けて、どういう言語間を移動して、どういう言語ポートレートを描けるのかということを、これは今この瞬間、ここで話しているということ自体が、私にとっては、語りを通して自分自身を見つめ直すことであり、自分自身を認めることでもあると私は思います。それを人に語ることによって相手から理解され、相手に受け止められるような「ことばの力」を育成することにより、子どもたちが長期的なスパンで関係性を構築することができる環境にないとしても、人との繋がりを感じることができる。あるいは、自分も人と繋がっていくことができるのではないかということが書かれていたんですね。これは、私の子どもにも語らせたいと思うぐらい、子どもたちには語らせるということが、子どもたちに「ことばの力」をどんどん身についていくというふうに考えさせてくれる章でした。

それから、三宅和子さんの第6章なんですけれど、ここにも非常に私自身の経験との強い繋がりを感じ、注目しました。「せざるを得ない移動」と「選択する移動」という最後の「展望討論」の中でも項目として出される部分なんですけれども、私の選択も、愛子さんと同じように思います。私の夫はカザフ人ですから国際結婚ではないんですけども、夫についてドイツに行くことについても、日本に来たことも、私が自ら選択して移動しました。だから愛子さんとの関連性も強いし、それと同時に愛子さんの娘のサキさんがブラジルに行って、そこから今度は家族をロンドンに連れて来るというところも、実は私が筑波大学の教員になって家族が私について来た、夫もカザフスタンに仕事もあったんですけど、私について来たということと重なるし、だから、夫は今、feeling displaced、「移動させられた」と感じていると思います。夫は日本語も話せないし、日本で英語だけで通しているので、サキさんも愛子さんの話も私にとって非常に身近に感じがありました。でもやはり愛子さんやサキさんがそうであるように、自信を持って私が選択したとか、少なくとも今考えると正しい選択だったんだと思いたいと、私はずっと悩んでいたんですね。私のことを優先して来たのが本当に良かったと100%言えないかも知れないと、この第6章の愛子さんと特にサキさんの話と、自分を結びつけて考えてしました。

次は、第10章の山下里香さんの「移動するパキスタン人ムスリム女性の青年期の言語生活」です。私は自分の博士論文の中で、少数民族の母語教育の保障というものはパラドクシカルなものなんだということを発見しました。それはなぜかというと法律的には母語での教育は保障されていて、施設・設備もあって、教員養成もされていて、教材開発もされているんですけど、

実は本人たちはその教育を望まないと言いますか、そこには積極的にはならないということがあって、それはどういうことだろうかという思いから、民族・母語教育のパラドックスという観点で私は見てきました。ただそこで、では彼らのアイデンティティとは何かという点で、私の博士論文の中でも最初は、本質主義的な捉え方で○○民族=○○文化=○○語=○○アイデンティティといった観念とか、先行研究においても構築されているような固定化した考え方で、最初は見ていたんですけど、博士論文を書き進め、いろいろと調査していく中で、そのような考え方は徐々に解体してきました。この章でもパキスタン人コミュニティにとって民族的アイデンティティは継承語の学習のみによって保持・伸長されるわけではなく、また継承語を保障できるわけではないということはまさに私の博士論文と共通点があると思いました。

この章と関連するのは、中国からの残留孤児をテーマにした上田潤子さんの第7章の中にも出て来ています。やはりコミュニティがあって、経済的にも強い言語ですと、継承言語はアイデンティティ形成にはそれほど影響を与えないのではないかと私は思っています。と言うのは、例えば、日本では在日カザフ人コミュニティ、あるいはカザフスタン人コミュニティというのがそれほど大きくなくて、カザフスタン大使館に登録されている人は、日本人との国際結婚している人も含めて230人しかいません。実際、私たちはバラバラなんですね。大体つくば市の中でも、筑波大学にはカザフスタンからの留学生はいるんですけど、短期留学だったり、若くて独身だったりで、家族と子どもを伴わないカザフスタンの留学生にとって、私は教員という立場でもあるので、近づきがたい存在でもあるかもしれません。つまり、コミュニティはないですね。また、カザフスタンという国は中国ほど経済的パワーも持っていないので、カザフ語も中国語ほどの競争力がありません。そういうことになるとコミュニティもなく、経済的なパワーがないカザフ語は、継承語としてアイデンティティ形成に与える影響が強いのではないかと思います。つまり、特にカザフスタン国外にいるカザフ人にとってはカザフ語がカザフ人アイデンティティの拠り所になっているということです。この第10章と第7章の、パキスタン人コミュニティや、この中国語というコミュニティの重要性と、そして、言語の経済的なパワーは、彼らの継承言語とアイデンティティを直接に結び付けないのではないかと思いました。

そして第11章の川上郁雄さんの「「移動する子ども」からモバイル・ライブズを考える」は、この本全体の問題設定として「定住の視点」から「移動の視点」へということ、そして、その移動の研究に、移動とことばのbifocalな視点が必要だということは、この第11章を読むとよくわかりますし、それまでのそれぞれの章で主張されていたことに対する、一つの総合議論と

して非常に分かりやすかったです。

そして最後の「展望討論」は、本全体を体系化してくれるような内容でした。私は、「移動とことば」研究とは何かということについては川上さんが290ページで「複言語環境における人の主観的意味世界を探求すること」と発言しているのがあって、私自身の研究に関してもここは示唆を与えるところでした。また、三宅さんがメディアとことばの視点からモバイル・ライブスを考えることを今後の課題として出されていたと思うんですけど、私もそうだと思います。とういうのも、自分の子どものことを考えると、スカイプ（skype）とかフェイスタイム（facetime）とかがあったからこそ、子どもたちはカザフスタンと非常に強い縁を持っていることを自覚しているし、あとユーチューブ（YouTube）なんかでは、カザフ語での番組も見られるし、そして、いろんな国にいるカザフ人の子どもたちが繋がっているようなネットワークを幸い作っている人がいて、そこにもアクセスできます。メディアがこの「移動とことば」に非常に大きな影響を与えており、私たち自身も地理的には定住していても、そういう空間の移動をしていけるということが重要なポイントだと思いました。

最後に、執筆者のみなさんに質問したいと思います。

私は博士論文を書いた時カザフスタンを中心に言語教育政策を見ていきました。はじめに、ソ連時代に構築された、民族解放のための母語教育と第二母語のロシア語という政策理念が、ソ連解体以降いかに変わっていったかということを見てきました。それから中央アジアの各民族共和国独立以降、マジョリティ民族の言語、例えばカザフスタンならカザフ語、ウズベキスタンならウズベク語といった言語と、ロシア語と、そして今は英語がせめぎ合っています。というのは、マジョリティ民族語が国家語として国民統合の象徴として、例えば90年代の独立直後に果たそうとしていたものが、今はロシア語と英語に取って代わられているのです。それは、政策的というよりは、そういう時代、それこそ、「モバイル・ライブズ」の移動も関わっていて、集団と個人の中で選択されていく中で、教育政策の中でも、ロシア語と英語とマジョリティの民族語のせめぎ合いというのが本当に激しく今現れています。

私は、その中では少数民族の言語的な人権の保障、Skutnabb-Kangas⁵の「Linguistic human rights」という観点から見ていました。

5 Tove Skutnabb-Kangas. (トーヴェ・スクトナブ=カンガス)。母語を学び維持する権利を言語的人権とし、地球上のすべての言語の保護と言語的多様性を主張する。Skutnabb-Kangas, T. (Ed) et al (1995) *Linguistic Human Rights: Overcoming Linguistic Discrimination* (Mouton De Gruyter; Reprint 2010)

博士論文ではカザフスタンを扱ったんですけど、今は5カ国の比較研究をやっております。そういう研究は、地域研究なのか、比較教育研究なのかといった議論もありますが、どこかの国の制度や政策を見るときは、その前には必ず生きている人間がいるということを私たちは忘れないです。政策文書、制度、政治家の発言あるいは、それこそ国家同士の権力関係とかにどうしても注目が行なっていますが、でもその一つひとつの政策は一人ひとりの個人にどういうふうに受け止められていて、彼らの今とこれからにどういうふうに影響していくのかという視点が弱いんですね。

私自身が制度や政策の研究を行う時は、やはりその個人の選択、特に私の場合は少数民族の言語選択にはこの「移動とことば」がどのような影響を与えているかということを、見ていかなければならぬなというふうに思います。

私は、この間、この宋基燦さんの『語られないものとしての朝鮮学校——在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』⁶を読みました。ちょっと長い引用になってしまいますが、ここで読ませていただきます。

人類学者が研究現場で遭遇する民族誌的な真実には、その伝達過程で二度の解釈が加えられる。一度目は人類学者により民族誌が書かれる段階において。二度目は、それが読者によって読まれる過程においてである。(宋, 2012: 9)

と。さらに、

民族誌的な真実が伝えられる過程で二度にわたり主観性が介入するという事実は「現実的真実」である。したがって、「民族誌的な真実」が所詮不完全な「部分的真実(partial truth)」に過ぎないなら、より深い理解のためには研究者自身の主観性に対する理解が重要となってくる。すなわち、研究対象に対して、研究者がどのような立場から、どのような感覚、感受性を持ってアプローチしたのかについての自省的認識である。」(宋, 2012: 9-10)

と書いてあります。

本書の各執筆者の皆さんは自分自身の立場をどのように考えているでしょうか。本書には一人ひとりの考え方、研究の示唆が明確に示されているものの、著者一人ひとりの移動の経験と教訓によって形成される、移動のポジショナリティは私には十分に読み取れませんでした。

6 宋基燦 (2012) 『「語られないもの」としての朝鮮学校——在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』 岩波書店

ですから、私が質問したいのは執筆者の皆さんがあなたが移動する者としての経験、認識、感覚、感受性をどのように理解し、位置付けているのか、あるいは、価値づけているのかという点です。その理解と位置づけ、あるいは、価値づけが、解釈にどのように影響しているのかということをお聞かせいただければと思います。

最後に、本書を読んで、私が「自分で選択した移動」を、娘たちに「せざるを得ない移動」をさせているということを、自覚しなければならないということを改めて考えました。そして、その複言語・複文化を生きる子どもも、我が子もそうですけど、そういう子どもたちの今とこれからに、正直言えば、不安の方が大きいんですね。

本書のような研究では、調査対象となる子は良い子、どちらかというと、色々な壁にぶつかっても自分らしくやっていける子が調査対象になっているのではないかという印象はどうしても否めないです。でも、そうではない子どもたちもいっぱいいますし、私も自分の子どもにはもちろん強い子であってほしいし、そういう風に育てているつもりではあるんですけど、本人たちが、どういう性格でどういう風になっていくのかということについては、私はまだ読み取れていないというか、不可能なことですね。

だから、不安が未だに私には大きいですし、この不安は、ずっと続くでしょう。みなさんが対象として扱ってきた子どもたち以外の子どもたちへの視座も必要かなと思いました。そして、私が冒頭でも述べたように、自分自身の移動という記憶と力を考え直す、省察することが必要だなということも、この本を読んで改めて考えさせられました。

1. 4. 〈三宅和子のコメント〉

クアニシさんのコメントに接して心を打たれたのは、本書の中の一人一人の「移動」に共感をもって寄り添い、自らを振り返りながら読むという非常に親密で丁寧な読み方をしてくださっていました。しかし同時に、「移動」に伴う問題意識を共有する比較教育学者の鋭い眼で、専門領域の問題に引きつけて内容を吟味し、対象に向かう研究者のスタンスの問題にも切り込んでくださっています。お話は三つのレベル（自身の移動体験、関連領域からの考察、さらに広い視野から研究姿勢を問う）において一つ一つ深い思いに支えられており、簡単にまとめられるような内容ではないと感じました。そこでここでは、私の関心事に絡めながら、お話の中で特に印象深く感じた点について考えたいと思います。

まず移動の経験と記憶についてです。クアニシさんご自身が様々な移動、すなわち時間的

(歴史的), 空間的, 言語間, 言語教育カテゴリー間の移動すべてを経験したという事実から出発せざるを得ません。10歳の時のソ連崩壊とカザフスタンの独立はその人生に大きな影響を与えたはずですし, 大学以降, 日本, ドイツ, カザフスタンという空間を, 勉強や研究, 夫や自分の仕事の関係で複雑に移動し, その間結婚してお子さんを伴う家族の移動もありました。時間的・空間的な移動の中で, 言語間, 言語教育カテゴリー間の移動もダイナミックに経験しています。第6章三宅和子論文や最後の「展望討論」で問題提起されている「自らが選択した移動」と「させられた移動」の違いに注目しているのは, ご自分の選択が夫や子どもの「せざるを得ない移動」を招いた, という妻や母としての振り返りも関与しているからでしょう。一方, 国の政策によって起こる「せざるを得ない」言語間の移動に関しても鋭い指摘を行っています。カザフ語はソ連からの独立後に公的・教育的に優位な言語となり, 高等教育でロシア語に取って代わるという大転換が起こるわけですが, 現在ではロシア語と英語がせめぎ合いながら強力な言語となってきているという矛盾に直面しています。第10章山下里香論文のパキスタンムスリムや第7章上田潤子論文の残留日本人家庭4代における継承語やアイデンティティ問題に連づけ, 言語の経済的なパワーを考える洞察力は, 単眼的視点, 定住の視点で考えていては生まれてこないのでしょうか。複眼的視点, 移動の視点で物事を捉えていくことで広がる世界の見方を提示してくれているように感じました。

次に, 「移動」に影響を与えるメディアの働きについてです。クワニシさんは2人のお子さんがインターネットを通じて當時カザフ語に触れたり, 世界中のカザフスタンの子どもたちと繋がったりできることを例に, メディアが「移動ことば」に非常に大きな影響を与えていていることを指摘しています。私は, 「展望討論」でも触れたように, 「移動する人々」の生活がメディアの発達によって変わってきたことに関心を寄せてきました。日系ディアスpora, 特に高齢に達した人たちに話を聞くと, 40~50年前に日本を離れてから長い間, 日本の友人や家族との連絡は難しく途絶えがちになることもあったといいます。ところが最近は連絡が頻繁になり, 音信が途絶えていた人と再び繋がったりしているといいます。地理的には依然として遠く離れているのに, 日本が近くなり自分の中での日本の位置づけも変わってきたといいます。その変化はインターネットが普及していく時期と一致します。知らない人同士がグローバルに繋がり, 局所的な出来事が世界中に拡散するなど, メディアは空間も時間も超えていきます。「移動する人々」の言語生活やアイデンティティにメディアがどのような影響を与えているか, これから考えていくべき大きな課題になると思っています。

最後に、クワニシさんは宋基燦（2012）を引用して、本書の著者たちが自身の経験や認識をどのように理解し位置付けて書いたのか、という大きな問い合わせています。合評会の質疑応答では時間の関係でここにほとんど触れられませんでしたが、研究者が避けては通れない「自己の立ち位置」の問題です。著者たちのアプローチは様々（ライフストーリー・インタビューや参与観察、短期間から数年をかけての調査など）なので、私が代弁する権利も能力もありませんが、第8章八木真奈美論文のように研究のスタンスについて表明しているか否かを問わず、それぞれ「自己の立ち位置」について自覚的であることは読み取れるように思います。しかしそれを表明すべきか否かの判断は、どのように語ることを目指したかによって異なるのではないかと考えます。近年のインタビュー研究では、インタビューそのものがインタビュアとインタビューイの共同構築であるという考え方方が主流になってきています。語り手が語るのは真実の一部、あるいは語り手が解釈した現実であり、それを聞く者もその語りをどう解釈するか、それをどのように書くかに主観性が潜むという考え方方が共有されています（Gubrium, J. et al. eds. 2012）⁷。従って、協力者から話を聞いて書くという行為そのものに、自分の立ち位置が反映されていると考えるべきではないでしょうか。私自身は愛子とSakiの二人の人生を紡ぐということを重視して、いわば「ノンフィクション」的手法で書きました。

私はお話を聞いた方たちの人生を「リアリティ」とカタカナ書きにすることがあります。それは、私の目に映った相手のストーリーが必ずしも相手の認識と一致しているとは限らないことや、相手が開示するのはほんの一部でしかないこと、記憶は無意識にも故意にも変化したり歪んだりすることを意識しているからです。つまり「真実」や「事実」を追い求めるという考え方からは距離を置く立場を示しているつもりです。

「自己の立ち位置」の問題は、文化／社会人類学、言語学、社会学、考古学など人間を研究する学問にとって根源的な問いであることは確かです。本書でも「展望討論」の「語りと記憶をどう分析するか」（285-287）で触れていますが、クワニシさんの問い合わせが、これからも著者たち全員の課題としてあることは間違いないと思います。

それにしてもパネリスト3名の方のお話は刺激に満ちたものでした。合評会の短い時間の中につめこむにはもったいないような内容で、様々な思いと研究への示唆が今後の糧となりました。「移動」に関心をもつ人々の異領域間交流の豊かさを実感したひとときでした。

7 Gubrium, J., Holstein, A. Marvasti, A. and McKinney, K. (2012) (eds.) *The SAGE Handbook of Interview Research: The Complexity of the Craft.* (Second Edition) LA: SAGE Publications, Ltd.

2. 「移動」と「ことば」が含意するものの多元性

下地ローレンス吉孝⁸

2. 1. はじめに

僕の研究はどっちか言うと社会学、歴史社会学的な感じなので、「言語」についてどういうふうに話せるかなと思ったんですけども、この本は、非常に面白く読ませていただきました。僕の研究対象は日本社会で混血とか、ハーフ、タブル、ミックスと言われるような人たちの研究です。その人たちの語りを思い出してみた時に、この本のテーマは自分にもすごく関係あるテーマだなと思いました。

2. 2. 印象的だった章

この本を最初に見た時に、子どもとか、いわゆる「当事者」みたいな枠で括られる人たちに対する分析が多いのかなと思っていたんですけども、研究対象が様々というところが本当にユニークだなと思いました。例えば、第4章の本間祥子さんの章ですと、佐倉先生という方が登場していて、その取り組みが分析されているところが興味深いです。そこでは、日本の教育を海外で実施してみて、その過程でふるさとや自分自身を振り返るという学習を実践されているのですが、その中で子どもたちが自分のふるさとに対して振り返って見た時に、自然と外国のものが入ってくるという記述が印象的でした。日本にもすごく活かせるいい教育実践だと感じました。日本の中でも最近外国の子どもたちがすごく増えていますが、そういった自分自身を振り返るような異文化理解も大切だと思います。

皆さんの中の「ことば」って何ですかと、皆さんの中で「ふるさと」って何ですかと聞かれた時に、例えば、自分は関西出身とか、親が九州だから九州のことばなんだとか、そういうしたことの中に外国のもの、海外で経験したものが入ってきて、移動の経験が自然に入ってくるという語りの中で、子どもたちの多様性を理解する佐倉先生の実践は面白いなあと思って読みました。

それから、第3章の山内薰さんの章も、面白いと思いました。この本を読む前には、「移動」

⁸ Shimoji Lawrence Yoshitaka (上智大学非常勤講師・社会学) . 主な著書は、『「混血」と「日本人」——ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』(2018、青土社)。

という言葉は単純に国際移動や空間的移動を念頭に置いていたところが、人生のライフコースというものが「移動」としても考えられるという話がそこに書いてあって、それはとても衝撃的でした。その言語を習得していた時期、自分の人生の流れ、そして言語というもののつながりが非常に興味深かったです。言語は、「使わないと腐っていく」と言われるように、使うプロセスや経験がすごく大事だと考えると、やはりライフコースにおける「人生の移動」と「言語」との接点はとても大事な論点だと感じました。

第7章の上田潤子さんの中国残留孤児の章では、80歳くらいの第一世代から第四世代までの「移動」の話で、孫、ひ孫までお話を聞くという、これは本当に圧巻のライフストーリーの聞き取りだなと驚きました。この家族のファミリーツリーの図があったりとか、僕はすごく面白かったです。

2. 3. 面白い論点

この本の全体に出てる論点、「移動とことば」というのを集約してみると、まずことばというのはモノリンガルというのが前提とされてしまう場合がしばしばありますけれども、ことばは複数あるというのがまずあって、またことばというのは行為なんだということが序章や各章にも出ています。僕にとっては、7ページ目に出ている「ランゲージング」という概念もすごく面白かったです。

それは先のライフコースの経験ともすごくつながる部分だと思うんですけども、時間的な移動とことばというのがすごくつながっているかなと思いますが、「ランゲージング」というのは、「個別言語がランゲージとして存在しているという捉え方ではなく、動態的、相互作用的、複合的なものとしてランゲージングというふうに捉える」ということが書かれていて、とても面白いなあと思いました。

最近アイデンティティというのをアイデンティティズというふうに捉えようという試みがあります。例えば、マスキュリニティ、男性性というのも複数あるというのを、オーストラリアの有名な研究者のレイワイン・コンネルが『マスキュリニティズ』⁹という本で書いていたりします。そういう点をさらに深めていく、このingを付けるランゲージングというのはすごく面白いと思います。アイデンティティというのは何かに自分を同一視するというそのものの過程だ

9 Connell, R. W., (2005) *Masculinities*, Berkeley, Calif. : University of California Press.

と捉えると、アイデンティファイっていう動詞からアイデンティファイングということばが生まれるかわかりませんが、自分を何かに自己同一していく過程は人生のどこか一時点で永遠に決まるものではなくて、本当にライフコースで移動しながら流動的に変わっていく、複合的に増えていくというような概念かなと思いました。

同じように「移動」についても面白かったです。移動は空間的なものだけではなく、時間に関わる点や、言語間の移動もこの概念で捉えていたところが面白いと思いました。

第9章の大塚愛子さんと岩崎典子さんの章に出てくるシンディさんというろう者の方の話はすごく面白かった。いわゆる両親ともにろう者の家庭で育った子どもたちのことは「コーダ¹⁰」と呼ばれたりするんですけども、その子どもたちの話が学生の頃から個人的に興味がありまして、シンディさんのお子さんたちもそういった両親とは手話で会話をし、それ以外の日常生活では日本語を使うという方々でした。その音声言語と手話との間の言語間移動、海外にも手話があるというのは知っていたんですけども、こういった形で手話を通して移動している経験というのは、すごく面白かったです。

2. 4. さらに考えたい点

もう一つは、「非移動性」というか、「移動させられる」側面、アイデンティティとどう関係しているのかというところが、最後の「展望討論」の286ページのところで「移動させられた人」についてどう考えるのかというのが今後の課題として出てくるんですけど、それもすごく興味深かったです。

そもそも日本語というのがある種当然なものとして登場しがちかもしれないんですけども、やっぱり日本語の中にも流動性とかそのランゲージング的な部分があると思います。僕の話ですが、家庭の中で怒られることばが二つあって、一つのは母のことばで、もう一つはおばあちゃんのことばで、一つは「アギジャビヨー」ということば、もう一つは「アヤマンズカダネゴト」ということばなんです。どっちとも怒られるときのことばなんです。母親は沖縄の那覇出身なのですが、「アギジャビヨー」はそのことばで、「Oh, my God!」みたいな感じ。僕が水をこぼしたとか何かを壊した時とかにいう怒ることばはすごく情動的なことばなので、僕の記憶にすごく残っています。もう一つは、父方のおばあちゃんにも怒られていたので、「あら、ま

10 Coda (Children of Deaf Adults) :ろう者の親を持つ聴者。幼少期より手話と音声言語の複数言語環境で育つのでその両方を使用する人が多いと言われる。

あ、仕方ないことだね」という意味なんですけれども、「アヤマンズ、スカダネゴト」と。実は、僕は10歳まで秋田の横手市で育てられたので、僕の故郷の言語というと、沖縄のことばは母の言語なんだけど、ふるさとの言語と言えば、身体化されているのは秋田、東北の方言なんです。

だから、すごく日本語の中でも複数あるっていうのを感じながら、この本を読んでいたので、その「移動」は国際間移動だけではなく、やっぱり地域間の移動というのもすごく大きいなあと思いました。以前、「関西から新幹線で関西弁を話しながら、友達同士で新幹線に乗っていて、品川駅で降りたとたんに、二人のことばが標準語に切り替わる」みたいな話を聞いたことがあって、すごく「移動」と「ことば」というのが密接につながっている。

もう一つ、皆さんと議論したい点は、この本の中でやっぱりルーツがあることと、ことばが話せることと、移動ができるっていうことが焦点として取り上げられているんですが、「できる、話せる、ある」っていうことが大事なポイントとしても、逆に気になったのは「ないこと」「できないこと」「話せない」っていうことがアイデンティティとどう関係しているのかという点です。僕は「移動」とか、「ルーツが不在」とか、「できない」という側面の経験をすごくしてきたので、その関係からいろいろ気になることがありました。

僕の祖父は米兵だったのですが、母親が生まれる前にアメリカに帰ってしまったという。祖父はあちらで再婚し、祖母もこちらで再婚したので、母親は生まれて一度も父親に会ったことがありません。会う前に父親がアメリカでなくなったということで、ちょっと聞くとなんか悲しいことになってしまふけど、僕はあまり悲しいとか感じない。ただし、母にとってはルーツ不在なんですね。アメリカとのつながりが不在であるが故に、英語が話せないんだけど、やはり身体としてハーフとして日本の中で生活していくんですが、白人的な外見で、「なんで英語しゃべれないの?」とか、お父さんに会ったことがないのに父親のことを聞かれるとやはり難しいです。やはりこの「不在」とか、「非移動性」といったものと、「ことば」、さらに「アイデンティティ」ということについて、僕は自分の立場から考えられるとは思ったんですね。

僕は「ハーフ」とか「混血」の歴史を研究しているんですけども、戦後に着目するとやはり自分の家族みたいに、基地の周辺で生まれた子どもたちがすごく多かった。また、在日とか、台湾とか、日本の植民地化した東アジアの地域の人々が日本に来ていて、その中で日本人と結婚した人も多く、その子ども達も日本に暮らしていたりもしました。けれども、やはりその米軍基地の子どもたちのケースの場合、圧倒的に先ほどの「不在」というのが多かったですね。だから、子どもたちは英語を話せないケースも多かった。一方で、英語が話せる子どもたちの親

は将校クラスでクライ¹¹がすごく高かったりするので、そういう人たちにはアメリカに移住するケースがとても多かったと思います。日本に残ったケースは結局しゃべれない。昔、「混血タレント」や「ハーフタレント」と呼ばれ活躍していた人たちのなかでもやはりしゃべれない人たちがいました。「在日コリアン」と呼ばれる人々の中でもやはり一世二世三世といった時に、朝鮮学校や韓国学校で勉強してきた人は話せたりするんですけども、やはり言語というのはだんだん「不在化」していく。さらに名前も日本語化していくので、僕の授業を聞きに来てくれた人たちの中には「自分も父親が在日なんですけど、ほとんど周りには自分のルーツを明かしていません」というような感じで話していたりする学生さんもいました。

一方、80年代後半から移民の背景が多様化することで、いろいろなルーツのハーフの子どもたちがすごく増えしていくんですけども、その中で日系人、日系南米人の子どもたちの中で、やはりことばとしてはスペイン語とかポルトガル語がメインの子どもたちっていうのも日本に移動てきて、そういう人たちの移動の歴史や、背景とその言語というのはそれぞれ異なるなあという自分の研究対象に照らし合わせながら考えました。

2. 5. 言語と身体性、階層、親密圏

最後に話したいテーマは、まず、「言語」と「身体性」という問題です。第2章の倉田尚美さんの章に、りかさんという人が出ていて、両親とも日本人なんですが、日本に来て日本語がしゃべれない、お店とかで注文するときにも、「なんで、この人、日本語しゃべれないんだろう」って見られて、注文することさえ大変なんだといった話が出てきます。僕は、すごく興味深いなと思いました。例えば、在日のハーフの子どもは外見も日本人として見られていたりするので、その自分のルーツというのを表出しにくかったりするけど、一方で、日本語で話すことが周囲から前提とされるんですね。りかさんの場合も、日本語が話せるという前提で見られて、しゃべれないのが周囲の違和感につながっていた。さらに、僕の母親とかだと外国人として見られてしまうので、逆にその日本語が話せることに対して不思議に思われたり、英語がなぜ使えないかと不思議に思われてしまうことがある。

見た目で外国人扱いされてしまうというのは、僕のインタビューしている協力者の中にもいました。彼の場合、どうやって回避するかというより、「まずこちらから話しかけるのが大事」

11 軍の位。階級。

と話していました。それを考えると、やはり言語が出てくるんですね。見た目で外国人扱いされる可能性があるときに、まず自分からとにかく話しかける、「こんにちは」とか自分の名前を言ったりすると、「ああ、この人は日本語しゃべれるんだ」みたいな相手の反応がある。身体を変えることはできないし、その真実を変えることもできないけど、言語と立ち振る舞いでなんとかその場をやりこめるというところがあると感じました。

次は、お金と言語という話はこの本の中ではあまり出てこなかったかもしれないんだけど、すごく僕は重要だと思っています。なぜかというと、学ぶこと、移動することは、やはりお金がかかると思います。もちろん、skypeとかそういった手法で、単純にお金が絶対重要かというわけではないと思いますけれども、やはり僕の母親も母子家庭で育って、英語の教育を受けられなかったということもありますし、やはり当時はお金がなかったので簡単にアメリカへ移動できなかった。やはり移動とその言語にはお金、ある種、階層や経済状況といったことも関連すると思うので、それをどう考えればいいのか。それは家族構成、例えば、片親家庭も、言語習得に関係するかもしれません。もう一つ、「非移動性」、移動させられてきたのと合わせて、移動していないコミュニティも気になりました。「ルーツがあること、話せること、移動できること」ということとアイデンティティの話がたくさん出ていたんですけども、逆に「不在であったり、できなかったり、話せないこと」とアイデンティティとどう関係しているのか。この本を読んだときに僕のルーツというとやはりアメリカになるんですけど、僕は英検三級なんです。僕は外国語学部で朝鮮語専攻だったので、韓国語のほうがどちらかというと、話せる。だけど、英検三級というのが自分にとってすごくトラウマ的なんだけど、でも、ある意味それで自分を納得させている部分もあって、その自分が英語を話せないってことこそがその歴史とすごく関連していると思います。父親不在で育った母親を見ていて、やはり英語が全く話せないんで、そういうこととアイデンティティ、父とのつながり、ルーツとのつながりというのを考えるのもいいかと思います。

最後に、ルーツとともに、もう一つ面白かったのが親密圏と言語という話も面白かったです。それは三宅和子さんの章に出ていたんですけど、RafaさんとSakiさんの話で、Rafaさんがポルトガル語なんだけど、Sakiさんがポルトガル語を勉強して、Rafaさんも英語を勉強して、なかなか大変だったけど、身につけていくみたいな話があって、自分のルーツだけではなくて親密な関係性の中での言語という点も、すごく興味深かったです。これも個人的な話なんだけど、私のパートナーは日系ボリビア人なんですけど、僕は自分の母親とは全然交流しないんですけど

れど、向こうの母親には毎日電話しているんです。それもスペイン語で交流しているんですね。ほとんど幼稚園生みたいな「何食べた」「何している」「どこにいる」みたいな話しかできないのですが、やはり「家にいるよ」、「ご飯食べたよ」みたいな、そういう話を毎日繰り返しているので、そうやって親密になったものと自分の親密圏で語られる言語と、自分自身の関係性というのもライフコースによって変わりうるものなんだなと感じました。

2. 6. 〈岩崎典子のコメント〉

今回コメントをくださった3名の方全てがご専門の視点からだけではなく、ご自分やご家族の経験から興味深く、そして鋭く洞察のあるお話を聞かせてくださいました。下地さんのお話もとても刺激的で、今後「移動ことば」の研究をする上で少なくとも留意するか、積極的に研究していく必要があると感じた点がいくつもありました。そのうち特に私が今後の発展の鍵になると考える2点を挙げます。

まず、一点目は地域間の「移動ことば」です。下地さんが「日本語というものがある種当然なものとして登場しがち」とおっしゃる通り、「日本語」という表現が何ら修飾されることなく当然のように使われることが多いのは確かで、本書でもそのような扱いが多かったです。今後、いわば「日本語の境界」とも言えそうな、日本語の複数性にもっと目を向ける必要がありそうです。下地さんが第4章本間祥子論文の佐倉先生の実践を読まれて、シンガポール在住の子どもたちが自分のふるさとについて「自分が関西出身とか、親が九州だから九州のことば…といったことの中に海外で経験したものが入ってくる」という子どもたちの多様性についての報告が印象に残ったというのも、ふるさとや自分のことばが単に「日本」「日本語」というより特定の地域、特定の地域のことばだったことも関係しそうです。下地さんご自身が子どもの頃、ご家庭では沖縄と秋田という地理的にはかなり離れた地域のことばが日常的に使われ、空間的移動なしに地域語間の移動があったこと、「身体化されている」のは東北方言だと感じられていることをとても興味深く伺いました。後日、この件について詳しく伺ったところ、お母様は沖縄から秋田、そして東京に移動されたそうで、下地さんは子どもの頃、秋田から東京へという地域の移動、それに伴う言語間の移動（東京方言への移動、一人称代名詞「おら」から「おれ」へ）も経験されたそうです。今後、地域間の移動も含める「移動ことば」の視点が「日本語」とその使用者を理解するのに重要かと思います。

次に「不在」と「非移動性」（「ルーツが」「ないこと」「（移動）できない」「話せない」）こ

と)です。下地さんのお母様のように身体性によって周囲の目が「海外のルーツがある」「移動できる」「話せる」ことを当然視するときに実はそうではない場合のギャップがその人にどのように影響するのか。今まで見過ごされていました。移動が顕著な人々は目に止まって研究対象となりやすかったということもあるかもしれません、今後、「不在」や「非移動性」についても見ていく必要を感じます(ただ、周囲から期待された移動をできず、期待されたルーツも不在という下地さんのお母様も、沖縄から秋田、そして東京という移動をされた。もしかすると、「沖縄」というルーツの存在は強く意識されていたかもしれません)。

一方、逆に、空間的には移動していない人々の間で、周囲に移動してくる人々との接触により(地域語を含む)言語間の移動が常態化していき、「移動できない」「話せない」と考えられていた人々のことばにも必然的に影響が及び、新たなことばの現象・使用が現れることでしょう。今まで以上にことばの流動性、ランゲージングが観察されることは間違いないありません。この点でもこれまでと違う「移動とことば」研究が展開しそうです。

ことばの流動性がアイデンティの流動性にもつながることは必至です。「アイデンティファイニング」の過程における地域性と国際性の兼ね合いも興味深いです。未知のことも多いです。まずは探索的で丁寧な事例研究を重ねることで、現象の実態を明らかにして行きたいと考えます。ご自分の経験から具体例を挙げながら、重要な課題を提示してくださったことを感謝しています。

3. 小笠原の島々から「移動とことば」を考える

デビッド・チャップマン¹²

3. 1. はじめに

まずは私の背景について少し述べたいと思います。私が初めて日本に来たのは32年前です。はじめは、英語を教えたりしていて、そのまま日本に滞在しようと思っていたんです。

私は、今まで3回日本に長く滞在したことがあります、2回目は夫婦として、3回目は子どもを連れて日本に来てほぼ2年間いました。そのとき早稲田大学にお世話になって、娘は近く

12 David Chapman (クイーンズランド大学・日本研究)。主な著書は以下。Zainichi Korean Identity and Ethnicity (2007) London, Routledge; The Bonin Islanders, 1830 to the Present: Narrating Japanese Nationality (2016), Lanham: Lexington Books; Japan's Household Registration System and Citizenship: Koseki, Identification and Documentation (2014), London: Routledge.

の小学校に通っていて、長男は中学校に通っていました。この本を読んで、そのときのハプニングを思い出しました。

ある日私はその小学校の娘の先生に呼ばれました。私達の日本に滞在する予定は2年間ということを先生に説明すると、その場で先生に「チャップマンさん、あなたたちは2年間の滞在ですが、娘さんを日本人として扱ってほしいですか、それとも短期滞在する人として扱ってほしいですか」と聞かれました。どういうふうに答えればいいのか、口から何も出てきませんでした。ショックだったんですよ。だから、「いや、ちょっと考えさせてください」と言いました。

そして、うちに帰って妻と相談して、「どうしようか」と考えました。結局、学校に行って、「三年生で、漢字が難しいので、ちょっと特別扱いでお願いします！」と先生にお願いしました。円満に答えたんですけど、結局、娘は漢字をあまり勉強しませんでしたが日常会話はできるようになりました。今、娘は20歳になって、日本に留学しています。ただ漢字はまだまだ娘にとって難しいようです。

3. 2. この本と私の研究

では、本についてお話ししましょう。この本を読ませていただいて、いろいろな面で深く考えさせられました。それで、「移動ことば」は日本語教育の世界で非常に大事な課題だとわかつてきました。日本と日本語の固定概念を問い合わせ直すというのは革新的です。それがこれから新しい道を開いていくのではないかと思います。

いくつかの章を取り上げながら私の研究と関連づけて話していきたいと思います。そして大切な課題について、私が貢献できればいいなと思います。私はコメントさせていただきますが、質問もたくさんあります。

私の研究分野は「日本研究」です。その中では、歴史学と人類学のアプローチを使って、研究の主なテーマは「日本社会のマイノリティ」です。それで、どういうきっかけでこのテーマを選んだかといいますと、私は最初日本に来た時大阪に住んでいました。そのとき親しい友達がいて、ある日に突然彼が「私は日本人じゃない」と私に報告しました。私は「えっ」と思って、その話を聞いたら、第一言語は日本語、生まれも育ちも日本だということです。見た目も日本人という感じなのに、どうして日本人じゃないのか？と聞きました。すると、「在日コリアンだよ。韓国人なんだ」と言うのです。それで、アイデンティティとかについて考えさせられて、もう少し知りたいと思って、これを私のPh.Dのテーマにしました。

ただ、在日コリアンだけではなくて、日本の戸籍の歴史も少し研究してきました。最近は小笠原諸島（ボニン・アイランド）の歴史について研究していました。その研究の中で、今日のテーマに関係あるハプニングについて、取り上げて説明したいと思います。

私はフィールドワークで、父島に7,8回くらい行きました。みなさん、父島はどこにあるかわかると思いますが、よくテレビの天気予報に出るんですけども。東京から1000kmくらい離れていて、船に乗って、片道25時間くらいかかります。かなり遠いんですが、東京都内です。

それで、2回目か3回目に父島に行ったとき、ある日資料館でいろいろな資料を調べていました。真夏だったので、終わったら冷たいビールでも飲みに行こうかと思って、近くにあるバーに入りました。店名は「ヤンキータウン」というのです。もともとヤンキータウンというのはバーの辺りの地名でした。そして、中に入ったら知っている人がいて、「こんにちは。元気ですか。」と挨拶しました。それからビールを注文して、席に座ったんです。

すると、向こう側に、東京から来た夫婦が座っていました。その奥さんは私に突然「すいません、日本の方ですか？」と聞いてきました。「えっ」とびっくりしました。結構ショックというか、驚きました。はじめてそういうことを言われて、不思議だなあと思いました。だから、言ったんですよ。「私はオーストラリア人です。日本人じゃない。」と。そして、「なんで私が日本人だと思ったんですか？」と聞くと、「この島だとわからない」と言うんです。

それがどういう意味かというと、みなさんは小笠原諸島の歴史をご存知かどうかわかりませんが、今年（2018年）は、日本に返還されて50周年になりました。少し説明しますと、父島と母島は、1827年には英國の領土でした。そして3年後、船で20数名ぐらい父島にやってきて、船に乗っている人はヨーロッパ人や、イギリス人、アメリカ人でした。太平洋の島々からの多くの女性もいました。そして1876年に、小笠原諸島は急に日本の領土になりました。それで、島民全員は帰化して「日本人」になりました。ですから、最初にやってきた人の子孫は今でも父島にいます。だから、私みたいな顔をした日本の方がいます。そう考えると、さつきの質問はそんなにおかしくないというわけです。

ただ、質問した女の人はある程度期待していたのではないかと思います。要するに、島の歴史を知っていて、島に来てそういう違った顔をする日本の方に会えるのではないかと。私の姿を見て、「あ、この人はもしかして最初やってきた人の子孫じゃないか」と思ったかもしれません。ですから、私がオーストラリア人ですよと言ったために、少しがっかりしたみたいです。

その後、私はいろいろ考えて振り返ってみたんですけど、私の反応も不思議なのではないかと

思いました。私は「どうして私が日本人だと思ったんですか」と質問しましたが、逆に「Why not?」と言えるじゃないですか。私は、何十年も日本のマイノリティについて、その血統主義や固定概念についていろいろ疑問視していたのに、突然「日本の方ですか」と質問されたら「ショックだ」とか「驚いた」という反応をしてしまったことは、基本的におかしいと思います。だから、私の顔を見て「日本人じゃない」ということは当たり前、当然というふうに思う人がほとんどだろうと思いますけど、それは反省しないといけないと思います。

3. 3. 移動と日本社会

『移動とことば』という本は、この「Why not?」という疑問の方向に進んでいるのではないかと思います。例えば、9ページに書いてありますように、「日本と日本語という固定概念に裂け目を開けることにより、人とことばと社会の関係を問い合わせし、それから新たなリアリティと人間理解を探求したい」ということは、これまでの「日本人論」的な姿勢を批判的に見ているのです。三宅さんが使っていることばを借りますと、この本は、白と黒、自己と他者の間の灰色部分のリアリティを把握することがポイントになっています。すごくいいことだと思います。

この本は、「移動とことば」という bifocal なアプローチを用いて、「移動とことば」の視点から、地動説の複合的・動態的・多元的・流動的・立体的なリアリティを明らかにするという目的で書かれていて、非常にいまの時代に合っていると思います。

具体的な例として、私は父島のフィールドワークで、最初に父島にやって来た人の子孫に何回もインタビューした時、特にアイデンティティについて尋ねました。当然ながら、多様な答えが出て来ます。例えば、「私は日本人です」「私はアメリカ人です」「私はアメリカ人でも日本人でもなくて、僕はただの Bonin Islander です」とか、また「私は何人かわからない」という人もいます。さらに非常に面白いのは、「返還の前は、私はアメリカ人でしたが、今は日本人です」という答えでした。Bonin Islander は日本籍なのに、アイデンティティは複雑、多元的、多様です。

第7章の上田潤子さんの「ある中国残留孤児の系譜」というテーマを例として取り上げますと、上田さんが書かれたように、歴史の中の人々の移動もそうですが、複数の言語、複数の文化の間で葛藤する人は、移動しながら複雑で多様な自己を形成する過程を経ます。頭の中で、自分のアイデンティティはどんなものか、いろいろ考えているというのは明らかです。

そして、この移動というテーマの中で面白い点がもう一つあります。移動の意味は幅広い解

釈があります。その中の一つは、人は移動しますが、「周りの環境が変わって、移動する」ということです。父島の場合、最初にやって来た人は移動しましたが、そのあとずっと移動せずに島に滞在しています。変わったのは島の空間です。つまり、最初、島はイギリスの空間で、それから日本の空間になりました。そして、そのうち、戦後は1968年まで父島はアメリカが占領して、アメリカの空間でした。沖縄と違って、その頃、島の学校で使った言語は英語でした。それで、急に、1968年に小笠原諸島は日本に返還されました。だから、国家空間は動いているのですが、人々は動いていないのです。要するに、「移動せずに移動した移動」というか。その点では、もちろん沖縄もある程度父島と同じでした。

3. 4. 視点は multifocal

歴史的には、人間の移動という現象は新しくないですが、現在の移動の規模は増加していて、世界で7人に1人が移住者であるという統計が出ています。想像のつかない人数です。もちろんこういう状態は日本に影響があると思います。言うまでもないですが、日本の場合は、高齢化や少子化、過疎化のために人材が足りない状態です。こういう話はもう何十年も前から話題にのぼっていますが、現在深刻な問題になりました。日本は外国人労働者が128万人（2017年）で、5年前の2倍になりました。いま日本のコンビニやレストランに入ると、ほとんどの店員さんが外国の方です。ベトナムやミャンマーの人人がたくさんいます。

この間読んだ新聞の記事では、ある調査の結果によると、外国人労働者にとって日本で一番難しい問題はことばだということです。この記事での「ことば」というのは狭い意味の解釈だと思います。ただの language という意味ですね。この本はそれとは違って、「ことば」というのは広い意味として討論されています。要するに、language だけではなく、アイデンティティ、生活のストラテジー、コミュニケーションの技能などが含まれています。

例えば、第8章の八木真奈美さんの「Agency」っていうのは非常に面白いと思います。経験の移動ということですが、これは自分の人生の中の経験をもとに戦略的に工夫をして、日常生活がプラスになるようにするということです。社会の中でうまくやっていくためには、ことば以上のスキルも必要だからです。

最後の「展望討論」にも書いてありますように、移動とことばはさまざまな研究分野や教育に関連してくるテーマです。多様な課題として、移動とことば以外にアイデンティティとか帰属意識とか国籍、文化などを取り上げているので、bifocal というより、multifocal になってい

ます。つまり、bifocal は二つの視点から見ることですが、multifocal は複数の視点から見るとということです。この探求の中では、いろいろな分野で当事者の声も出ていますが、これは日本と日本語の固定概念を広く開けるために、この灰色部分のリアリティを把握するという目的は達成できたと思います。

逆に固定概念を持っている人は自分で頭の中にあるリアリティは事実だと解釈しています。そういう人にとっては日本の单一民族論、血統主義の固定概念はリアリティとして解釈しています。だから我々は固定概念ではなくて、multifocal の考え方で説得するために、現場の声を示すのは非常に効果があると思います。ですから、たくさんの人々にこの本を読んでほしいですね。

3. 5. さらに考えたいこと

最後になりますが、二つの質問をしたいと思います。一つ目は、「移動とことば」の前提として、ことばは英語の language という意味より幅広くて、ディスコースという意味に近いのではないかと思います。ですから、ディスコース（言説）と言葉の関係についても考察すればどうかと思います。特に、アイデンティティについて話すとハーフとか、日本人、外国人、定住外国人、在日、日系とか、いろいろなラベル（ことば）がありますが、これらの言葉は言説の概念の中でもう少し考えたいと思います。

二つ目は、本に出ていた「スーパーダイバーシティ」、超多様化社会ということばについてです。このスーパーダイバーシティというのは、流動化する社会のパラダイムシフトと書いてありますが、これから日本社会はますます変わっていくので、逆に移動者だけではなく、定住者（日本人）でも日本社会にインパクトが大きいと思います。

3. 6. 〈川上郁雄のコメント〉

チャップマンさんのコメントは、彼の日本研究に基づくもので、興味深いものでした。私が彼に初めて出会ったのは、30年ほど前です。私が国際交流基金の派遣する日本語教育専門家として豪州クイーンズランド州の教育省へ赴任したとき、彼は現地の高校で日本語と科学と体育を教える教師でした。当時、私は妻と子どもたちを連れて赴任し、のちに大学教員となったチャップマンさんは家族を連れて早稲田大学に来られました。チャップマンさんのコメントに出てくる最初のエピソードは、その時のことです。つまり、共に「移動する家族」の歴史を持ち、彼は日本研究をし、私はオーストラリア研究を行ってきたのです。

その頃から、彼とよく議論したのは、「日本と日本人の境界」です。ある研究誌で「日本と日本人の境界」をテーマにした特集と一緒に組んだこともありました¹³。チャップマンさんが小笠原で経験した、「日本の方ですか」と問われたこと、そしてチャップマンさん自身が「なんで私が日本人なの？」と答えた自身の答え方に疑問を呈しています。長年日本研究を行い、日本のマイノリティ研究の最前線にいた自身の反応を振り返り、吐露した自分自身への疑問は、私たち一人ひとりが持つ「認識枠」が簡単に変わらないことを示唆しているように思いました。「移動」が常態化する現代社会を意識しつつ「日本人の境界」を専門とする研究者であっても、咄嗟の反応は固定的な発想になるという指摘は、貴重で、重要です。

また、小笠原を例に、「移動せずに移動した移動」という比喩的な表現は、小笠原諸島に関する歴史的視点からの指摘でした。これは、戦前の台湾や朝鮮半島で行われた日本語による教育を受けた人たちにとっても、同様のことです。生活のために、また生きるために、学ばざるを得なかった言語という意味では、世界各地で実践された植民地主義教育の歴史と重なります。その歴史的事実の中にも、そしてそれに続くポスト・コロニアル時代の社会においても、「移動とことば」研究で取り上げるべき課題は多くあると思われます。

最後にチャップマンさんが指摘された二つの点も、重要です。一つは、「ことばには language という意味もありますが、ディスコースという意味もあります。」と述べ、「ハーフとか、日本人、外国人、定住外国人、在日、日系とか、いろいろなことばがあります」と述べた点です。これは、「移動とことば」研究において、社会的コンテクストに関する研究や、歴史的研究の必要性と重要性を指摘していると理解しました。ことばを使用する人は、他者や社会との関係の中で生きているわけで、その社会的コンテクストの中で使用されることばが個人の意識や考え方、行動、認識等に大きく影響していく。その総体となるものをディスコースと呼ぶならば、「移動とことば」という bifocal な視点から multifocal な研究にならざるを得ないだろうというチャップマンさんの指摘も、重要な指摘であり、研究を進める上で常に意識すべき点でしょう。

もう1点は、「スーパーダイバーシティ」、超多様化社会という点が定住者にもインパクトが大きくなるだろうという指摘です。この指摘はその通りです。超多様化社会はすべての人に関わることです。「移動とことば」という研究領域は、移住者や複数言語環境に生活する人に限定されるものではありません。なぜなら、「定住者」と自覚する人も、多様な人々と日常的に接触

13 民俗学や文化人類学等を研究する「比較日本文化研究会」の会誌『比較日本文化研究』第17号(2014)で、特集「「日本」「日本人」の境界を問い合わせる」を組んだ。

したり、人生の間に定住と移動を繰り返す可能性もあるからです。

「移動とことば」研究は緒についたばかりの新しい領域です。本書で述べたように、「移動とことば」研究には地動説的発想のパラダイム転換が求められます。これまでの人文社会科学で使用されてきた集団や個人を捉える従来の枠組みを超える、流動的で、複層的で、そして時空間に広がる「生のリアリティ」を捉える新たな視点が求められており、その視点に「移動とことば」が重要な切り口になると考えます。